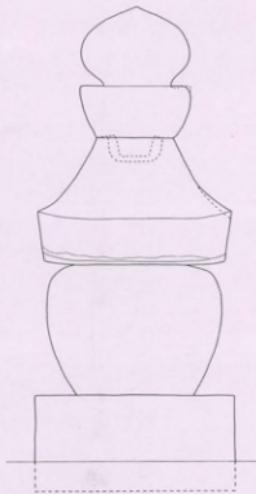


## 神内家墓地石塔群

— 香川県高松市西植田町所在五輪塔群・宝篋印塔の調査 —



2005年3月

高松市教育委員会

## 例　　言

- 1 本報告書は、高松市教育委員会が平成12年度に実施した文化財緊急調査委託事業の調査報告書である。
- 2 現地調査については大谷女子大学 教授 藤澤典彦氏に委託した。さらに、報告書については藤澤氏の原稿・図面・写真をもとに高松市教育委員会が編集した。
- 3 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)

池田　誠(港区立港陽中学校)	岡本広義・西　匡之(元興寺文化財研究所)
片桐節子	神内菊次・神内　清(土地所有者)
藤井直正(元大手前女子大学教授)	藤澤典彦(大谷女子大学)
松田朝由(大川地区行政振興整備組合)	
吉田重幸(元香川大学農学部教授)	
- 4 本報告書の編集は、高松市教育委員会文化部文化振興課 文化財専門員 川畠聰が行った。なお、執筆分担は次のとおりである。

第1・2・4章 川畠聰	第3章 藤澤典彦
-------------	----------
- 5 本文中の句読点等については、執筆者の意思を尊重して統一していない。
- 6 本文の挿図として、国土地理院発行2万5千分の1地形図「高松南部」「川東」および高松市都市計画図2千5百分の1「西植田1」を一部改変して使用した。
- 7 調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 8 本報告書の高度値は海拔高を表し、第5図の方位は磁北を表す。

## 目　　次

例言・目次	.....	1
第1章　調査の経緯と経過		
第1節　調査の経緯	.....	2
第2節　調査の経過	.....	2
第2章　地理的環境・歴史的環境		
第1節　地理的環境	.....	3
第2節　歴史的環境	.....	3
第3章　神内家墓地石塔群調査概要		
第1節　神内家墓地の立地	.....	7
第2節　石塔の分類	.....	7
第3節　石塔の配置とその時代	.....	7
第4節　石塔の解説	.....	8
第5節　まとめ	.....	12
第4章　史料に見られる神内氏		
第1節　江戸時代の讃岐歴史書に見られる神内氏	.....	17
第2節　神内氏関係史料に見られる神内氏	.....	18
第3節　神内氏関係史料に見られる石塔群の記述	.....	20

# 第1章 調査の経緯と経過

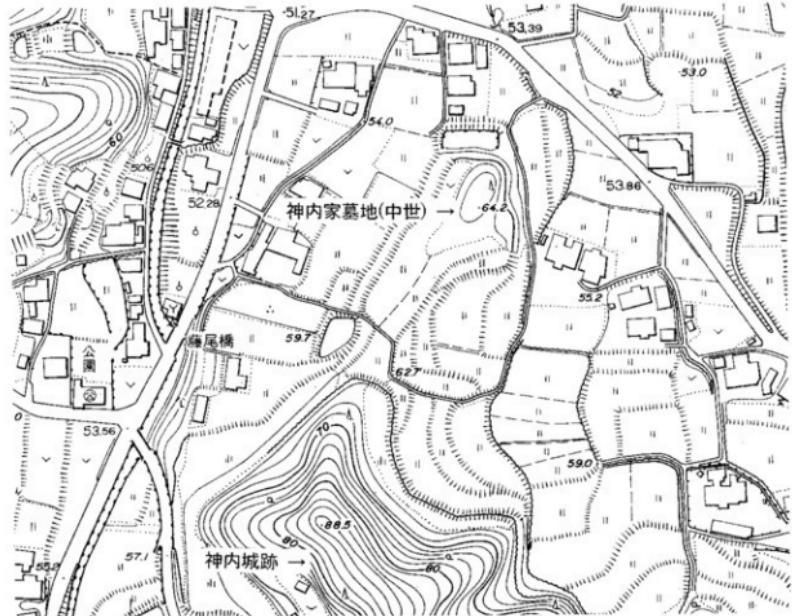
## 第1節 調査の経緯

高松市西植田町所在の神内家墓地石塔群は、中世の墓地景観をよく留めているだけでなく、神内城跡の麓に位置することから城とのセット関係が注目されている遺跡である。鎌倉～室町時代の五輪塔が原位置を保って建っており、その下には川原石や安山岩板石が認められ、墓域を知ることができる。

ところが、酸性雨等の影響もあってか、五輪塔の保存状態が近年良くないという意見が聞かれるところから、本市教育委員会で現況を調査することになった。その実施にあたっては、五輪塔に詳しい大谷女子大学教授藤澤典彦氏に調査を委託した。

## 第2節 調査の経過

平成13年3月に大谷女子大学教授藤澤典彦氏と元興寺文化財研究所岡本広義・西岡之彌氏が来市され、さらに地元から片桐節子・松田朝山氏の協力を得て、調査を開始することになった。調査は、3月15日～17日までの3日間で行った。調査の内容は、主要な五輪塔および宝篋印塔の実測図作成と写真撮影、そして地形測量図の作成である。確認されている五輪塔は計13基に及ぶが、保存状態が良好でないものを除いた10基と宝篋印塔1基が調査の対象となった。また、当初調査対象外だったが、道を隔てて隣接する近世墓地の五輪塔1基も銘文が見られることから実測図を作成していただいた。



第1図 調査地位置図（縮尺1/2,500）

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。さらに、この平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れ瀬戸内海へ注ぐ香川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地である。

さて、このうち春日川をさかのぼり、支流である朝倉川と分岐する付近は、古くから植田と呼ばれている狭小な平地である。高松平野の南東端にあたり、すぐ南には讃岐山脈が控えており、平地の標高は40～50m前後を測る。西側は讃岐山脈から続く標高255mの上佐山などによって遮られ、東側も小規模な丘陵がのびていることから、地形的に一つの空間を形成している地域である。

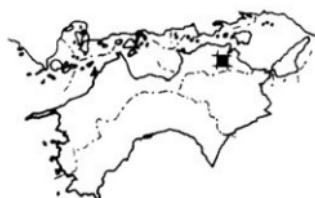
### 第2節 歴史的環境

調査地周辺は、古代においては讃岐国山田郡に含まれる。『倭名抄』によれば「殖田」「蘇甲」「池田」「三谷」といった郷名が見られ、現在の東・西植田町、十川東・西町、池田町、三谷町に該当すると考えられている。

これらの地域、とくに第3図の範囲内において、最古の遺跡は竹元遺跡で、縄文時代晚期後半の土坑と自然河川が確認されている。ほかに縄文土器出土を伝える遺跡はあるが、詳細は不明である。

弥生時代の遺跡でもっとも古いのは、光寺寺山遺跡である。小丘陵掘より前期末の土器包含層が確認されており、環濠が存在する可能性を指摘する意見もある。中期末から後期初頭に属する中山田遺跡は、丘陵上に位置する高地性集落で、焼失した痕跡を残す竪穴住居跡や倉庫跡などが検出されるとともに、分銅形土製品が出土している。通谷遺跡でも中期末の土器が出土するとともに、後期後半の土器棺墓が7基確認されている。後期後半に属する竹元遺跡では、竪穴住居跡や大溝・土坑が検出されている。葛谷遺跡も後期の遺跡で、ベッド状遺構を有する竪穴住居跡が検出されているほかに、有茎銅鏡が出土している。円養寺遺跡では、後期末以降の土器棺墓が4基確認され、切谷遺跡でも後期に属する土器棺群の出土が伝えられている。このように、後期になると遺跡数が増加するようであり、この動向は高松平野中央部と連動しているようである。

次の古墳時代では、集落跡は不明だが、古墳が數多く確認されている。円養寺遺跡では、前期に属する直径8～30mの円墳3基が調査されており、粘土床をもつ竪穴式石室3基や箱式石棺1基とともに、銅鏡が1面出土している。同じ前期と推定される川東1号墳からは、銅鏡1面と玉類が昭和5年に出土しており、円墳と伝えられる。西尾天神社古墳は、直径35m、高さ約4mを測る二段築成の円墳で、墳頂部に安山岩の板石が認められ、中期後半と推定されている。後期前半に属する尾越古墳は、丘陵頂部に位置する全長36mの前方後円墳で、家形埴輪や円筒埴輪の出土が知られている。大龜古墳群も、尾越古墳と同じ後期前半と推定される円墳群で、丘陵上に現存3基、おそらく5基以上から構成され、円筒埴輪や鉄刀、須恵器が出土している。後期後半以降になると、この地域においても横穴式石室を主体部にもつ古墳が多く築造されるようになる。調査されたものでは、中山田3・4号墳で2基、葛



第2図 遺跡位置図

谷遺跡で 1 基の古墳が検出されている。未調査だが、上佐山東麓古墳や東植田八幡馬場先 2 号墳では石室が開口しており、東植田八幡馬場先 1 号墳も石材が露出している。ほかに、光専寺山東・西古墳、池山合子神社御旅所古墳、本村古墳群などが知られるが、時期・内容とともに実態はよく分かっていない。

古墳以外では、古墳時代後期末～飛鳥時代に操業していた公測窯跡群の須恵器窯があり、窯業地域として機能していたことがうかがえる。

飛鳥時代になると、この地域においても古墳築造が終焉し、寺院建築が認められる。下司磨寺では、塔跡と推定される礎石をもつ基壇が残されており、周辺からは大和川原寺式の複弁八重蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦、せん仏が出土している。ただし、その後、寺院が継続して維持されたかどうかは不明で、次いで見られる軒瓦は平安時代中期または後期のものである。平安時代後期と推定される蛭宇神社経塚では、銅製經筒が出土している。

鎌倉～室町時代といった中世では、唯一の調査例である葛谷遺跡では柱穴が検出されている。この葛谷遺跡の近くから強引と鎧箱鐵が出土している。松尾庵寺は丘陵上に位置し、鎌倉時代の軒丸瓦が表採されている。光専寺山遺跡は、その名の示すとおり室町時代に光専寺が建っていたと伝えられており、室町時代頃の遺物が表採されている。今回調査対象となった神内家墓地石塔群は、まさにこの鎌倉時代末期～室町時代にかけての遺跡である。

室町時代から始まる戦国期の動乱は、この地域にも及び、数多くの城館が造られている。神内家墓地の造営集団である神内氏の神内城跡、三谷氏の上佐山城跡・三谷城跡・池田城跡、十河氏の十河城跡、植田氏の戸田城跡・戸田山城跡、稗田城跡がある。神内・三谷・十河氏は、植田氏一族の 3 弟兄とも伝えられ、これら 4 氏がともに提携して活躍していたようである。その中で、戦国末期に頭角を現したのが十河氏で、阿波三好氏から養子をもらうことによって阿波から讃岐にかけて一人勢力を築くが、土佐長宗我部氏の讃岐侵攻によって、領国からの撤退を余儀なくされる。その後、十河氏は豊臣秀吉の四国平定に従い再び戻ってくるが、九州戸次川の戦いで当主が討死している。以上の合戦などにより、各氏族はその勢力を失い、城館も廃絶していったようである。

江戸時代では、生駒家 4 代による讃岐一国支配の後、松平家 11 代による高松藩領となり、明治維新を迎えるのである。

#### 【神内家墓地五輪塔群をとりまく環境】

中世の神内家墓地は、第 4 図のとおり、神内城跡が頂上に築かれた台山（標高約 88 m）から北東へのびる尾根上（標高約 64 m）にあることから、密接な関係をもつと考えられる。さらに、西側の平地には「城屋敷」という地名が残ることから、當時の居館が平地にあり、詰城として神内城が築かれたと考えられる。さらに、神内氏が庇護したと伝える藤尾八幡神社が、城跡の南東約 500 m に位置している（第 3 図左下）。このように、中世における城館と墓地、神社の位置関係が分かる貴重な例となっている。なお、東側の平地にも「本屋敷」「中屋敷」「的場」といった地名が残っている。

神内城跡は、頂部に 2 つの曲輪をもち、曲輪には土堤が築かれ、廻切も認められる。『讀陽古城記』などによれば、神内氏は、この神内城を拠点としていたが、後に高松市北部にあたる木太郷にも神内城を築いており、植田に 300 石、木太に 700 石を有し、後に木太の神内城に拠点を移している。

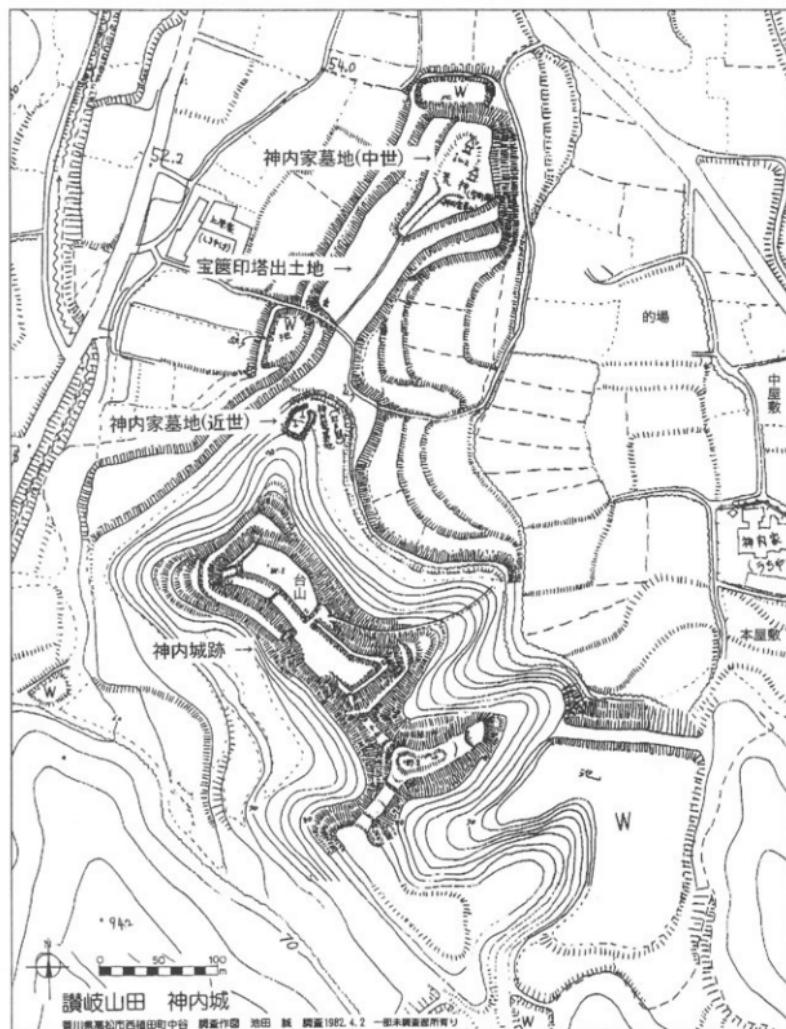
さて、神内家墓地は、現在、平面 60 × 20 m の不整形を呈する林となつて残されており、周囲が畠によって開墾されている。ただし、墓地の南西にあたる畠中央付近から宝篋印塔が出土しており、さらに南西の尾根づたいに墓域が広がる可能性もある。墓地の参道が、現在は林の南西から北東方向へのびており、中程で東へ折れてもっとも古い五輪塔 No.1・2 に達する。参道横にも、五輪塔が並び、川原石または安山岩の板石を敷いているものも認められる。五輪塔 No.1・2 より更に北東方向の奥へ進み、丘陵最先端にも五輪塔が見られる。

なお、近世に入つてからの神内家墓地は、神内城跡と中世の神内家墓地との間、神内城から北東へのびる尾根の途中を削って造営されており、ここにも五輪塔が建立されている。



- |                     |                 |            |                   |            |
|---------------------|-----------------|------------|-------------------|------------|
| 1 神内家墓地石塔群          | 2 神内城跡(台山城跡)    | 3 備蓄銭出土地   | 4 蔴谷遺跡            | 5 開善寺遺跡    |
| 6 松尾磨寺              | 7 切谷遺跡          | 8 本村古墳群    | 9 大龜古墳群           | 10 尾越古墳    |
| 11 莲田城跡             | 12 上佐山城跡(王佐山城跡) |            | 13 中山田遺跡・中山田3・4号墳 |            |
| 14 池田合子神社御旅所古墳      |                 | 15 上佐山東麓古墳 | 16 通谷遺跡           | 17 三谷城跡    |
| 18 光尊寺山道路、光尊寺山東・西古墳 |                 | 19 池田城跡    | 20 川東1号墳          | 21 西尾天神社古墳 |
| 22 鹰宇神社経塚           | 23 十河城跡(西尾城跡)   | 24 公測窯跡群   | 25 下司磨寺           | 26 竹元遺跡    |
| 27 東植田八幡馬場先古墳群      |                 | 28 戸田城跡    |                   |            |

第3図 周辺主要遺跡位置図 (縮尺 1/25,000)



第4図 神内城跡縄張り図(縮尺1/4,000, 池田誠氏原図)

(香川県教委 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』に一部加筆)

## 第3章 神内家墓地石塔群調査概要

### 第1節 神内家墓地の立地

2001年3月15～17日に高松市西植田町所在、神内家墓地五輪塔群の調査を実施した。以下はその概要である。

五輪塔群は神内城跡から北に伸びる舌状尾根の先端部に営まれている。中世墓地はこのような尾根に営まれる場合、多くの例では尾根の付け根付近に最初の墓が設定され、次第に先端方向に展開していくのが普通であるが、現状で見る限り尾根筋の墓道を中軸に先端から奥に向かって展開し、近世になってからは、尾根の奥から先端方向に向かって展開している。このことは神内氏の居館の位置と関係すると考えられる。居館から墓地への道の最奥が尾根先端部になるのだが、尾根西方に城屋敷の伝承地があるとの事であり、屋敷地の背後の高所に墓地を配し、尾根の中央部横から墓道を設定したのである。その墓道は現在の道と重なる可能性がある。

### 第2節 石塔の分類

五輪塔には大きく二種類があることが指摘できる。白色の凝灰岩製の一群と粗質の角砾凝灰岩製の一群である。形態から見ても前者が古く鎌倉末から南北朝にかけてのもので、後者は室町時代のものである。サイズ的にも前者は大きく、後者は小型化している。このような一群の墓塔中では大型のものほど古く、時代が降るほど小型化していくというのが全国的な傾向として指摘できるが、このことは本石塔群にも当てはまる。

また石塔下の築石も前者には角の丸くなった扁平な川原石が使用されるが、後者には扁平な節理する石材（安山岩）の割石が敷き詰められている。

まず前者の石塔から見て行くが、これも大きく二種類に分けることができる。空風輪が一石のものと二石からなるものである。形態的には二石彫成のものの方がやや古いものと考えられる。ただ空風輪に関しては、火・水・地輪と本米の組み合わせを保っているとの確証はなく、現状の組み合わせが本来のものかどうかについては何ともいえない。時代的には二石彫成のものは鎌倉時代後期まで遡る可能性はある。ただ近世墓地の最奥にある五輪塔も空風輪は二石彫成で、近世五輪塔では珍しい手法であり、古い遺品を見て伝統が復活したのであろう。

二石彫成空風輪五輪塔の分布は東北から九州までかなり広く見られるが、石造五輪塔では比較的大型の遺品にのみ見られる所で、数量的にそれほど多いものではない。また逆に小型の工芸品、特に鎌倉時代と考えられる水晶五輪塔などにはままみられる所であり、その伝統をひいたものといえるであろう。神内墓地では別石空風輪が3個体みられ、きわめて珍しい例といえる。

### 第3節 石塔の配置とその時代

神内墓地内の石塔配置は尾根中軸線が墓地の中央墓道になっておりその最奥の一基（No.1）はこの墓地最初の五輪塔の可能性が高い。No.2がNo.1の脇に位置するが、No.1の周囲には川原石が敷き詰められており、No.1はその石敷範囲のほぼ中央に位置する。さらにその石敷範囲のさらに外側に石列があり二重の区画を形成している。略測したところNo.1がその区画のほぼ中央に位置する事が明確である。No.2は内郭の川原石敷きの手前向かって左角に位置し、No.1の後に配置された事が明瞭である。

No.1に関しては神内右近頭政成の墓との伝承があり、政成の死が保元2年（1201）のようだが、石塔はそこまで遡るものではなく鎌倉後期のものと考える。

No.7はこの墓地最大の塔で各部の組み合わせも本米のものと考えてよいであろう。空風輪は一石

彫成であるが、風輪上面を内斜させる点など古い五輪塔にみられる特徴であり、鎌倉時代後期までは遡る可能性はあるだろう。この塔に関しては神内左右衛門太郎重尚の墓との伝承がある。神内重尚は畠山重忠の次男とされており、重忠は長寛2年（1164）～元久2年（1205）が生存年であり、その次男とする重尚の生存年は12世紀後半から13世紀初頭になるが、本塔は13世紀後半のものと考えられ、伝承の年代とはやや齟齬がある。

その他、手前の壇中から彫り出されたとされる宝篋印塔が墓地入り口部分に建てられているが、ほぼ完存しており、注目すべき遺品といえる。時代的には南北朝末から室町初期のものと考えられる。表面には整形の鑿痕も明瞭に残されており、製作技法を考える上でも重要な遺品といえる。

#### 第4節 石塔の解説

##### 1. 五輪塔 No.1 鎌倉時代 高 124.7 cm 幅 63.7 cm

細部法量：空輪欠、風輪高13.8cm、風輪幅26.8cm、火輪高38.4cm、火輪軒厚12.0cm、軒隅厚12.8cm、火輪上幅26.3cm、火輪幅63.5cm、水輪高46.3cm、水輪上幅46.9cm、水輪最大幅64.5cm、水輪下幅43.2cm、地輪高26.2cm、地輪上幅63.7cm

尾根最上面の最先端に位置する。No.2と同じ石列区画の中に位置するが、No.1が右列区画のはば中央に位置し、No.2はその向かって左脇に位置することからNo.1が先に造立され、No.2が後に配置されたと考えられる。現状では最上に空輪が欠損した風輪が上下逆に置かれ、その下に別物の水輪が置かれている。火輪から地輪まではバランス的に同一個体のものとしてよいが、風輪はやや小さく別個体のものと考えられる。地輪はほとんど地中に沈下しており、この位置は原状を留めているものと考えられる。石組区画は二重であり、内郭には人頭大の平坦な川原石が敷き詰められている。この墓所の構造を（入り口を）どのように考えるかによって変わるが尾根の途中に入り口とするなら、尾根先端部のこの位置は墓地の最奥に当たるわけで、その意味からは墓地最古の石塔の可能性がある。

##### 2. 五輪塔 No.2 鎌倉時代 高 80.4 cm 幅 48.6 cm

細部法量：空風輪欠、火輪高27.8cm、火輪軒厚10.0cm、火輪軒隅厚11.5cm、火輪上幅17.6cm、火輪幅47.0cm、水輪高34.5cm、水輪上幅26.0cm、水輪最大幅42.2cm、水輪下幅26.5cm、地輪高18.1cm、地輪上幅42.0cm、地輪下幅42.6cm

No.1の脇の礎石区画内に位置する。原状では火輪上に空輪の破片と考えられるものがのっているが、本来の一具ではない。火輪は降り棟の反りがやや強い点が特徴的である。火輪は最大幅の位置がかなり高い。

##### 3. 五輪塔 No.3 室町時代 高 60.3 cm 幅 30.2 cm

細部法量：空風輪欠、火輪高17.9cm、火輪軒厚5.3cm、火輪上幅13.8cm、火輪幅30.2cm、水輪高22.4cm、水輪上幅16.8cm、水輪最大幅30.6cm、水輪下幅17.4cm、地輪高20.0cm、地輪上幅28.3cm、地輪下幅28.4cm

現状では火輪上に丸い別石がのっている。火輪以下は一具としてよい。火輪は軒反りの強いのが特徴的。地輪はやや高い。塔周辺に築理する平坦な石が敷き詰められている。ほぼ現位置を保っているものと考えられる。塔の石材は角礫凝灰岩であるが、角礫凝灰岩の中では比較的目は細かい方である。



第5図 神内家墓地石塔群配置および周辺地形図（縮尺 1/250）

#### 4. 五輪塔 No.4 室町時代 高 58.3 cm 幅 30.8 cm

細部法量：空輪欠、風輪高10.9cm、風輪幅21.8cm、火輪高18.0cm、火輪軒厚5.0cm、火輪上幅14.8cm、火輪幅26.5cm、水輪高22.8cm、水輪上幅20.3cm、水輪最大幅30.6cm、水輪下幅16.7cm、地輪高17.5cm、地輪上幅30.8cm、地輪下幅30.8cm

現状では火輪上に風輪が上下逆転してのっているが、この風輪下の出ホゾが大きく火輪上面のホゾ穴に納まらず、別個体と考えられる。この風輪は風輪上面にもホゾ穴があり空風輪別石の五石形成五輪塔のものである。水輪は上下に大きなホゾ穴らしきものが穿たれており、あるいはホゾ穴ではなく納骨穴の可能性がある。現状はやや傾斜地に立っており地輪下には白色凝灰岩が埋ませてあり、原位置は動いている。

#### 5. 五輪塔 No.5 室町時代 総高 129.8 cm 高 112.3 cm 幅 37.5 cm

細部法量：空輪高 20.5 cm、空輪幅 25.4 cm、風輪高 12.3 cm、風輪幅 25.1 cm、火輪高 26.5 cm、火輪軒厚 9.3 cm、火輪上幅 17.1 cm、火輪幅 32.7 cm、水輪高 27.3 cm、水輪上幅 18.5 cm、水輪最大幅 37.5 cm、水輪下幅 21.5 cm、地輪高 25.7 cm、地輪上幅 31.4 cm、地輪下幅 31.7 cm、蓮台高 17.5 cm、蓮台上幅 31.7 cm、蓮台下幅 43.5 cm

銘文：【正面】ア 【左側面】文正元年（1466）卯月□日

空風輪二石形成で、全体として五石形成五輪塔である。火輪は降り棟の反りが大きく、軒面が強く外反し新しい傾向を示している。火輪上面のホゾ穴は平面四角であり、風輪下の出ホゾ平面は円形があるので、本来の一具ではない可能性が高い。空風輪の方は南北朝に遷すると考えられる。地輪には小さく梵字アがあり、向かって右側面には「文正元年（1466）／卯月□日」の銘文がある。地輪下に反花座蓮台がある。中央に大きく1弁隅弁が2弁、間弁2弁の配置である。平坦な斜面に線刻しただけで弁表現に抑揚が無い。蓮台下の塔周辺に節理する平坦な石が敷き詰められている。

#### 6. 五輪塔 No.6 鎌倉時代 幅 54.8 cm

細部法量：水輪幅 54.8 cm、地輪上高 21.0 cm

白色凝灰岩の大型の水輪で、半分以上埋もれている。上面の風化が強い。その上に石が載っているが別石である。水輪周辺に大きな自然石が散乱し、石組みが存在しているようだ。

#### 7. 五輪塔 No.7 鎌倉時代 高 181.2 cm 幅 74.5 cm

細部法量：空輪高 29.6 cm、空輪幅 39.8 cm、風輪高 18.8 cm、風輪幅 40.6 cm、火輪高 47.5 cm、火輪軒厚 16.2 cm、火輪上幅 27.8 cm、火輪幅 72.0 cm、水輪高 49.0 cm、水輪上幅 36.4 cm、水輪最大幅 64.6 cm、水輪下幅 44.3 cm、地輪高 36.3 cm、地輪上幅 74.5 cm

この石塔群内最大の塔である。空風輪は一石。風輪上面は内傾する。火輪は軒面が外反し、軒裏に反りがみられる。地輪は1/3ほど埋没している。地輪上面・側面には懸の痕跡が明瞭に残る。塔周辺は川原石で敷き詰められており、石組みの存在が推測される。

#### 8. 五輪塔 No.8 空風輪=鎌倉時代 火輪以下=室町時代 高 125.0 cm

細部法量：空輪高 22.7 cm、空輪幅 31.8 cm、風輪高 16.4 cm、風輪幅 30.0 cm、火輪高 26.8 cm、火輪軒厚 6.7 cm、火輪上幅 19.5 cm、火輪幅 44.0 cm、水輪高 30.1 cm、水輪上幅 23.5 cm  
水輪最大幅 38.0 cm、水輪下幅 20.5 cm、地輪高 29.0 cm、地輪上幅 40.5 cm、地輪下幅 41.3 cm、空風輪は二石形成。鎌倉時代のものである。火輪以下は時代的に降り室町期に入ると考えられる。火輪軒厚がやや薄い。幅が地輪・水輪よりもやや広く水輪以下とも別石の可能性あり。地輪はやや高く、裾括がりの台形を呈す。塔周辺には節理する平坦な石が散乱し、本来は敷き詰められていたようである。

#### 9. 五輪塔 No.9 鎌倉時代 高 94.5 cm

細部法量：空風輪欠、火輪高 36.5 cm、火輪軒厚 10.2 cm、火輪上幅 15.5 cm、火輪幅 50.1 cm、  
水輪高 37.0 cm、水輪上幅 29.9 cm、水輪最大幅 49.1 cm、水輪下幅 28.0 cm、地輪高 21.0 cm、  
地輪上幅 47.3 cm、地輪下幅 47.6 cm

空風輪欠、火輪は上幅がやや狭く、降り棟の反りも強く尖った感じである。軒裏は反りが無く平坦。  
軒面は外反する。水輪は下半分の膨らみがこの群の中では強い。地輪はやや台形であり、平坦である。  
半分以上埋没し、原位置を保っていると考えられる。塔周辺に川原石が散乱し、石組みがあったと  
考えられる。

#### 10. 五輪塔 No.10 室町時代 高 43.8 cm

細部法量：屋根高 16.2 cm、屋根幅 29.8 cm、水輪高 27.6 cm、水輪最大幅 36.2 cm

屋根部は宝珠と屋根とが一体の整形であり、宝珠の形態から五輪塔の空風火輪ではなく、小型石  
幢または笠塔婆の笠部と考えられる。水輪は室町期の五輪塔である。水輪下に石材があり、石組み  
が存する可能性がある。

#### 11. 五輪塔 No.11 火輪・上水輪・下水輪=南北朝 高 97.5 cm

細部法量：火輪高 28.0 cm、火輪幅 43.2 cm、上水輪高 31.5 cm、上水輪幅 43.9 cm、  
下水輪高 38.0 cm +  $\alpha$  (推定 45.5 cm)、下水輪幅 60.0 cm

火輪と上の水輪は本来の一具であろう。室町期のものである。下の水輪は大型で高さは 45.5 cm  
程度に復元できる。周辺に石材があり、石組みの存在する可能性がある。

#### 12. 五輪塔 No.12 南北朝 高 75.0 cm

細部法量：空風輪高 25.8 cm、風輪幅 22.8 cm、火輪高 13.9 cm、火輪幅 32.0 cm、水輪高 35.3 cm、  
水輪最大幅 41.7 cm、水輪下幅 24.5 cm

水輪は上下逆転している。火輪は風化が強く、生きた面は少ない。空風輪の整形は荒く、特に風  
輪のカーブは堅く、南北朝でも室町に近いものと考えられる。

#### 13. 五輪塔 No.13 南北朝

細部法量：水輪高 37.1 cm、水輪幅 46.2 cm、地輪？高 16.0 cm、地輪？幅 47.4 cm

かなり風化の強い地輪と半割の水輪である。凝灰岩製。南北朝のものであろう。宝篋印塔横に原  
位置から遊離して置かれている。

#### 14. 五輪塔 No.14 江戸時代 総高 178.7 cm 高 154.7 cm

細部法量：空輪高 34.8 cm、空輪幅 30.6 cm、風輪高 21.2 cm、風輪幅 28.4 cm、火輪高 32.3 cm、  
火輪上幅 28.5 cm、火輪幅 52.2 cm、火輪下幅 33.5 cm、水輪高 32.9 cm、水輪上幅 29.3 cm、  
水輪幅 47.7 cm、水輪下幅 28.6 cm、地輪高 33.5 cm、地輪上幅 37.0 cm、地輪下幅 36.7 cm、  
基礎高 24.0 cm、基礎幅 55.5 cm (推定)

粗い角礫凝灰岩製。各輪にキャカラバアの四門展開を配す。空風輪は二石からなる。空風輪とも  
外形のラインが直線的である。火輪は軒が強く外反する。地輪現正面に「六月四日／施主 □一□  
／三谷佐左門」と配す。「施主」とあるので個人の供養塔ではなく墓地全体の供養塔として造立さ  
れた物と考えられる。「三谷佐左門」は同墓地の自然石墓標にみられる「三谷佐左衛門」に当たる。  
地輪下に基礎がある。江戸時代初期の造立と考えられる。

## 15. 宝篋印塔 空町時代 高 149.2 cm

細部法量：相輪高 45.0 cm、相輪幅 16.3 cm、笠高 38.8 cm、塔身高 24.7 cm、塔身幅 24.6 cm、基礎高 40.7 cm、基礎幅 44.6 cm

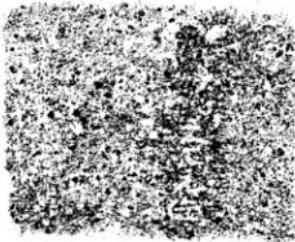
ほぼ完存。相輪は宝珠下と九輪下に単弁の請け花を配す。九輪の彫り込みは深く彫り込む。笠の上階最上段はやや高く造り、角を浅く面取りする珍しい手法を見せる。笠下階は低い。方立ては輪郭を取り、強く外反する。この塔の時代性を示すものといえる。塔身には何の表現もない。基礎は上部を階に造るが階は低い。基礎側面には盤跡が残る。時代的には室町初期頃かと考えられる。

### 第5節 まとめ

さて、この墓地が神内家の墓所であることは間違いないところであるが、全国的に見てこのような地方の土豪が墓所を形成し始めるのは元寇以降から南北朝にかけての頃である。関東武士が西国に移動し、その定着が確実になったのがその頃で、その時点でこの階層に墓地形成の動機ができたといえるのである。神内墓地もその年代観にほぼ合致すると言つてよいであろう。墓地開創の時点では家祖の石塔もつくられたと考えてよいであろう。

新しい方の墓地では最奥の五輪塔が注目される。三面が埋もれており、銘文は明瞭ではないが現状の正面地輪部に「六月四日／ア一 施主／三谷佐左門」の銘文がある。他面には年号の紀銘の可能性があり、精査が必要である。「施主」とある所から個人の墓塔ではなく墓地全体の供養塔かと考えられる。手前に近世墓塔・墓標が展開するが、それらの調査も行うと神内墓地の展開がさらに明確になるものと考えられる。

この墓地の石塔には石組み区画も作っているようで、発掘などがなされると、その形成過程がさらに明瞭になるであろうが、藤尾神社および周辺をも含めて中世的景観をよく残しており、このような景観の残存自体が重要である。ただ石塔に関しては軟質の凝灰岩製であり、かなり風化が進展しており、このまま放置しておくと形が崩れてゆく可能性がある。保存修復の必要があるだろう。



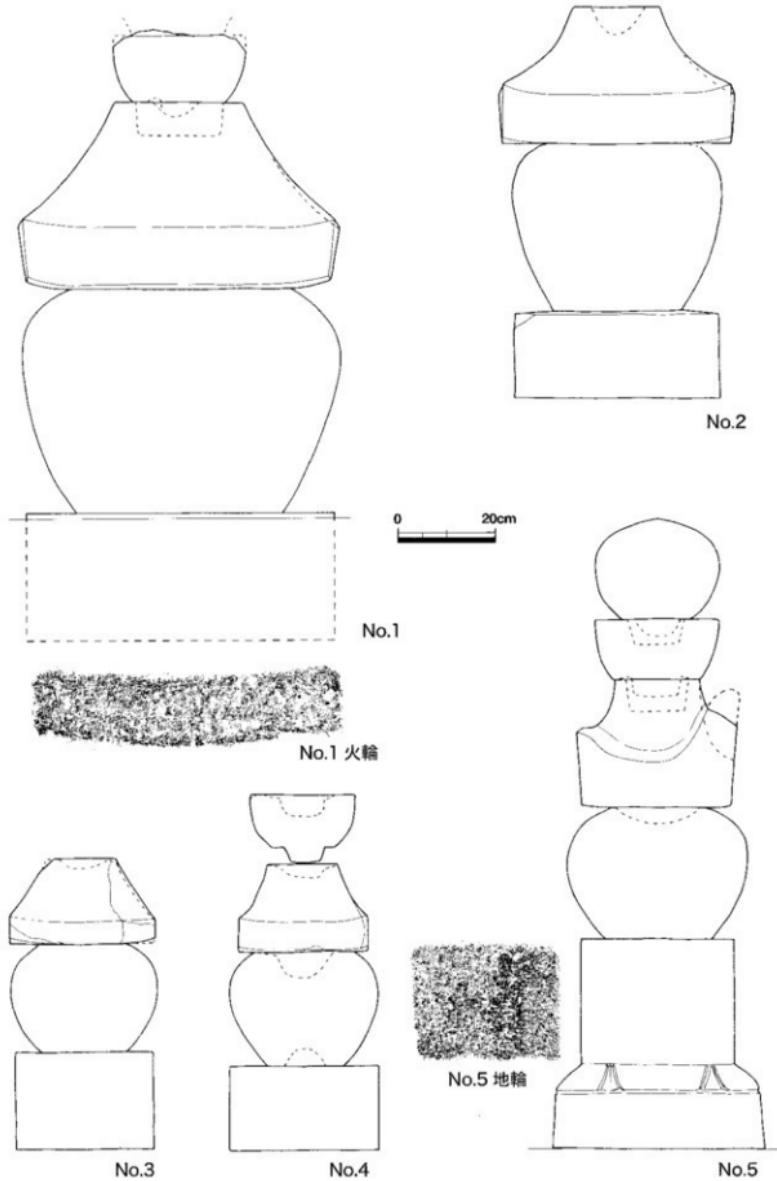
No.5 地輪銘文



No.14 地輪銘文



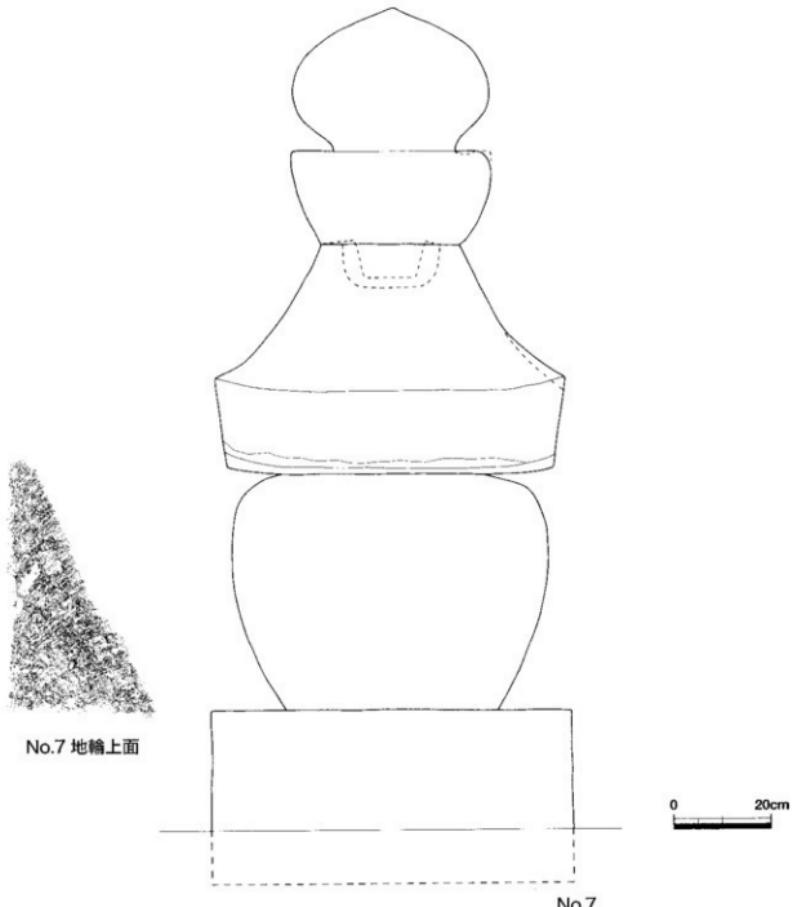
第6図 五輪塔 No.5・14 銘文拓本（縮尺 1/5）



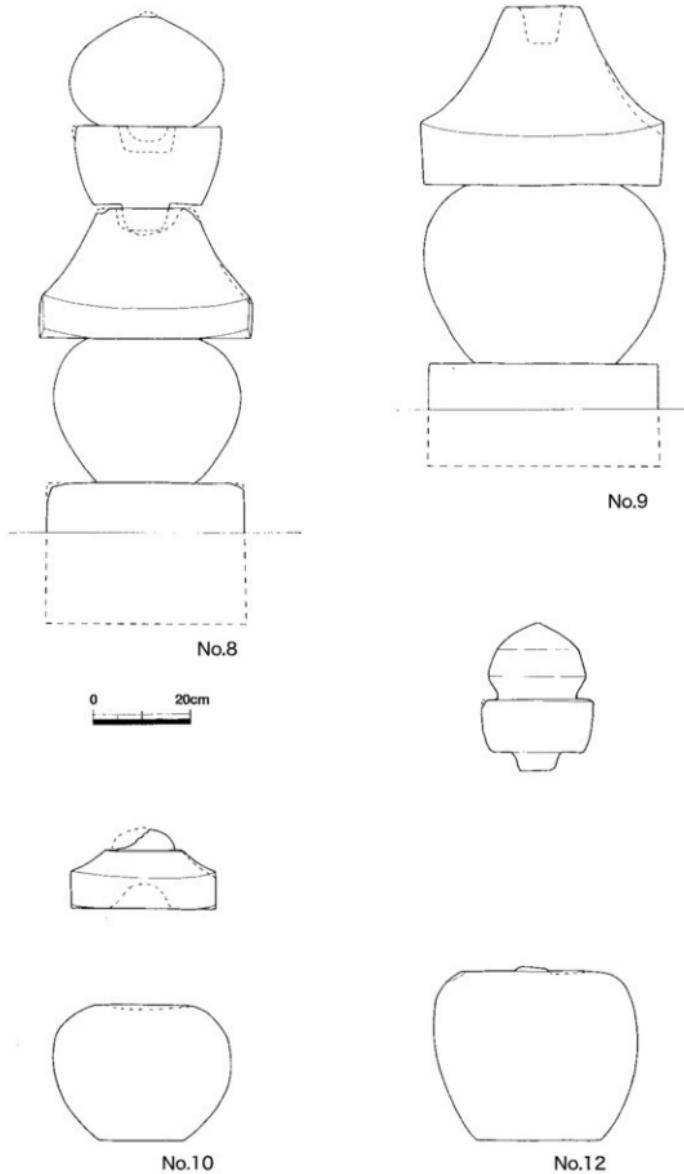
第7図 神内家墓地石塔立面図① (縮尺 1/10)



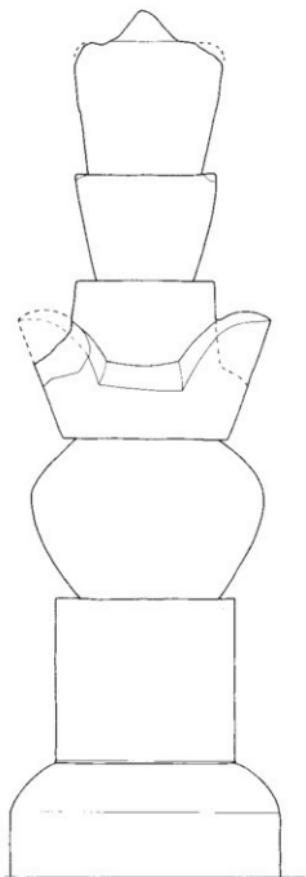
No.7 火輪



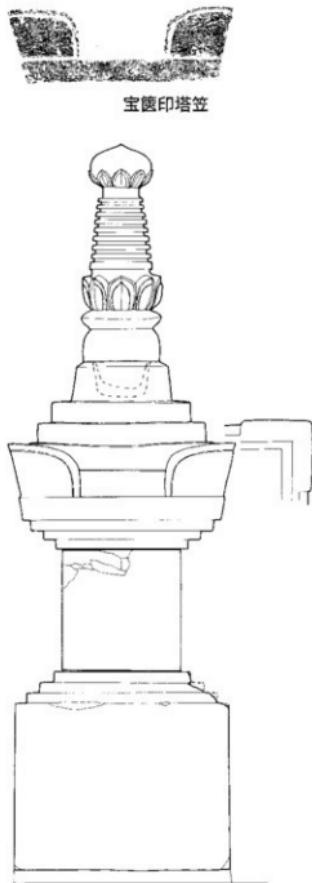
第8図 神内家墓地石塔立面図②（縮尺1/10）



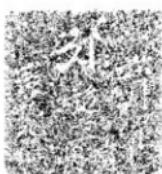
第9図 神内家墓地石塔立面図③（縮尺1/10）



No.14



宝箧印塔



No.14 地輪



宝箧印塔基礎

第 10 図 神内家墓地石塔立面図④ (縮尺 1/10)

## 第4章 史料に見られる神内氏

### 第1節 江戸時代の讃岐歴史書に見られる神内氏

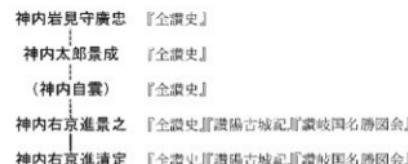
『全譜史』<sup>(注1)</sup>「神内城 西植田村に在り」によれば、「元暦の時、神内岩見守廣忠、源廷尉に属して功ありき。」とあり、元暦二年（1185）の源平屋島合戦に神内岩見守廣忠が源氏方として参加している。さらに「貞治の時に神内太郎景成ありき。」とあり、これは貞治元年（1362）細川清氏の白山挙兵に神内太郎景成が駆せ参じたことを指していると考えられる。最後に「天文天正の際、神内右京進景之及び右京進清定ありき。食禄は神内に西植田の内三百石、木太村に七百石、惣計千石ありき。」とあり、天文から天正年間（1532～92）にかけて神内右京進景之及び右京進清定がおり、西植田に三百石、木太村に七百石を領していたことがわかる。この木太村については「神内城 木太村に在り」によれば、「神内右京進豊之（景之の誤り）、西植田より移り来り、居を此にトセり。其の子清定之に居りき。(略)」とあり、西植田から木太村に拠点を移したことがうかがえる。一方、神内氏と関わりが深い「藤尾八幡宮 西植田村に在り」にも神内姓が見え、「(略) 永正中、神内自雲之を修造す。(略)」とあり、永正年間（1504～21）に神内自雲が存在した可能性がある。

『讃陽古城記』<sup>(注2)</sup>にも「東植田村神内之城跡 神内左京之進、木太ニテ高七百石、西植田ニテ高三百石凡千石。神内家、三谷氏・神内氏・十河氏三人兄弟ナリ。神櫛王末葉ト云。細川清氏に與カス。」「木太村城屋敷 神内右京進居。(略)【一名神内城。】」とある。

『讃岐国名勝図会』<sup>(注3)</sup>には「神内城跡 同所（東植田村）にあり。神内右京進景之その子清定等ここに居れり。植田の氏族にて西植田村千石ばかりの領主なり」「神内城跡 同所（木太村）にあり。神内左京進景之これに居たり」「神内清定の墓 同所（木太村）、薬師堂の東北にあり」とある。さらに、藤尾八幡宮 同所（東植田村）にあり。(略) 永正年中、神内自雲当社を修造す。(略)と書かれている。『讃陽古城記』『讃岐国名勝図会』とともに『全譜史』とほぼ同様な記述が見られる。

『南海通記』<sup>(注4)</sup>には、貞治元年の細川清氏による白山挙兵が詳しく述べられている。要約すると、神内・三谷・十河の三兄弟がおり、細川清氏の挙兵に際して、十河氏が一番に参るとともに、後日には神内・三谷の兄を連れて來たことなどから、細川清氏より十河氏が窓領になるよう言われている。

以上、文献に出てきた人物を系図にすると、第11図のとおりである。



#### 神内岩見守廣忠

元暦の時、源廷尉に属して功ありき 『全譜史』

#### 神内太郎景成

貞治の時に神内城にありき 『全譜史』

#### 神内自雲

永正中(1504～21)、藤尾八幡神社を修造す 『全譜史』

天文天正(1532～92)の際、神内城にありき 『全譜史』

食禄は、西植田に三百石、木太村に七百石 『全譜史』

『讃陽古城記』 『讃岐国名勝図会』

第11図 江戸時代の讃岐歴史書から作成した神内氏系図

## 第2節 神内氏関係史料に見られる神内氏

神内氏の活動を直接伝える史料としては、『神内氏系図』、藤尾八幡神社について記した『大保の宮の記録』、『神社明細帳』がある。これらの史料は現在見ることができないが、昭和15年発行の『木田郡誌』はこれらの史料を踏まえて記述されていると考えられる。さらに、藤尾八幡神社宮司宅には時期不明だが『神内氏系図署記』が残されており、神内氏について概略が書かれている。また、先代宮司が著せた『爺は宮に』(昭和49年発行)は、『神内氏系図署記』等をベースに記述していると想定される。これらは、『木田郡誌』と共通する箇所が多いことから、同じ史料を元にしていると考えられる。ここでは、『木田郡誌』『神内氏系図署記』『爺は宮に』を参考に記述していきたい。

### 【神内氏の系譜】

上記の資料をもとに作成した系図が、第12図である。関東の畠山重能の弟が、讃岐国植田郷へ来て、神内氏の養子となり<sup>(「神内氏系図署記」)</sup>右近頭政成を名乗り、神内城(台山城)を築いたとしている。その後、政成は源平屋島合戦に源氏方として参加している。また、藤尾八幡神社の勅請(社殿の造営)をし<sup>(注5)</sup>、神鏡を奉納している<sup>(注6)</sup>。

二代目として神内右衛門太郎重尚をあげておる、彼も関東出身で、政成の甥(畠山重忠)の次男である。初代同様に藤尾八幡神社を庇護しており、寶藏を建立するとともに随神を奉納している。

神内武藏頭重範は、最初は植正成の陣に加わり、後に新田義貞に従っている。

神内丹後守重詮の時に、上佐山城へ移り、それ以後三谷姓を名乗っている。それ以後、式部重行・弥七郎景晴と続く。景晴は、『南海通記』や『讀陽古城記』にも見られ、化鳥退治有名である。

神内佐渡重次(慈雲)は、藤尾八幡神社々殿を再興した人物として、『全讀史』にも記されている。

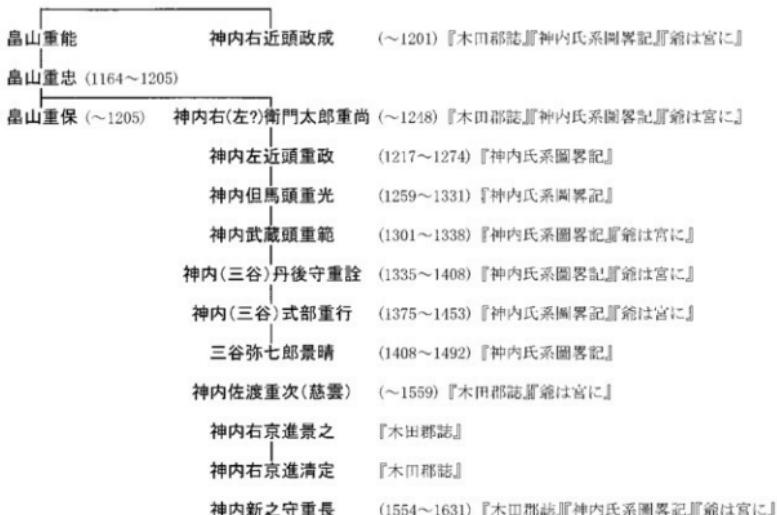
神内右京進景之・清定父子は、『爺は宮に』には載っておらず、『木田郡誌』のほかに『全讀史』『讚陽古城記』『讚岐国名勝図会』に名が見える。これは、『木田郡誌』編纂の時に、『全讀史』なども参考にしたためと考えられ、神内氏史料には載っていない可能性がある。景之・清定父子は、それまでの植田郷から離れ、木太郷に居を移していくことを考えると、植田郷に残った神内一族とは枝分かれした可能性がある。最後の城主である神内新之守重長は、神内氏史料にのみ見られ、彼の墓と伝わる五輪塔が植田郷に残っている。

### 【『全讀史』と神内氏史料との比較】

『全讀史』などの江戸時代の讃岐歴史書と神内氏史料のどちらが史実を反映しているかは明らかでないが、ここでは両者の相違点を挙げておく。

両者の大きな違いは、神内氏の出自である。『全讀史』などでは、神内・植田・三谷・十河の四氏族が、または神内・三谷・十河の三氏族が植田一族として、同族関係にあると述べている。これらの氏族は、景行天皇の第十七皇子と伝える神櫛王の末裔として紹介されている。一方、神内氏史料では、神櫛王の末裔であると同時に、関東の武将畠山家の血筋を引く家系としている。第3章第5節で、西国における墓地造成の動機が元寇後の関東武士による西国移動と関わりがある点が指摘されており、鎌倉時代前葉と後葉という時期差があるものの、興味深い共通項である。憶測の域を出ないが、神内氏の出自は関東に求められ、讃岐国植田郷に移住してからは、養子縁組・婚姻等を通して地元有力氏族と同族関係を結んでいった可能性がある。

次の違いは、木太郷に移り住んだ神内右京進景之・清定父子の取扱である。『全讀史』などでは、木太郷にも神内城を築き、植田に300石と木太に700石を領していたという。この木太郷への移住については、高松平野に大きな勢力をもっていた香西氏の支城である松綱城と向城の間に至近距離で神内城が第13図のとおり削って入っていることから、高松平野南東部で絶対的な勢力を有していた十河氏による戦略つまり香西氏への牽制と考えられている(秋山志1982)。なお、木太郷神内城の存在については、発掘調査によって確認されている(高松市教委2001)。一方、神内氏史料では、神内右京進景之・清定父子の名が見えず、戦国末期まで植田郷の神内城が存在している。このことは、木太郷へ神内氏の一部が移住した後も、植田の地に神内氏が留まり、変わらない勢力を有していたと考えられる。



#### 神内右近頭政成

別名:最初は畠山重満で、屋島合戦時には神内岩見守廣忠(『爺は宮に』)、後に道善(『木田郡誌』)  
 畠山重能の弟で、十七歳の時、讃岐に来て、神内城(台山城)を築く『木田郡誌』『神内氏系圖略記』『爺は宮に』  
 保元二年(1157)藤尾神社を勧請する(『木田郡誌』)社殿を造営し、神鏡を奉納する(『爺は宮に』)  
 源平尾島合戦では、義経に味方する『木田郡誌』『爺は宮に』

#### 神内右衛門太郎重尚

畠山重忠の二男『神内氏系圖略記』『爺は宮に』  
 建暦元年(1211)藤尾八幡神社の寶藏を建立し、随神を奉納する『木田郡誌』『爺は宮に』

#### 神内武藏頭重範

元弘元年(1331)七月 捷正成とともに赤坂の城並びに金剛山に於て、北条氏と戦う『爺は宮に』  
 同年十月 新田義貞とともに越前の金崎城に入る『爺は宮に』  
 厥応元年(1338)正月 濃洲青野原にて合戦し、七月二日新田義貞とともに討死する『爺は宮に』

#### 神内丹後守重詮

永和元年(1375)山田郡池田村上佐山に築城する『神内氏系圖略記』『爺は宮に』

#### 三谷弥七郎景晴

永享五年(1433)、内裏にて化鳥を射落とす『神内氏系圖略記』『爺は宮に』

#### 神内佐渡重次(慈雲)

永正元年(1504)藤尾八幡神社の社殿再興する『木田郡誌』『爺は宮に』

#### 神内右京進景之・清定

天文・天正年間(1532~92)神内城主『木田郡誌』  
 木太郷神内城に移り、西植田300石・木太700石を領す『木田郡誌』

#### 神内新之守重長

上:佐山城主三谷道人重信の嫡子『爺は宮に』  
 天正元年(1573)植田美濃守景高とともに藤尾八幡神社より分霊して東植田八幡神社を祭る『木田郡誌』『爺は宮に』  
 天正年間(1573~92)仙石權兵衛によって領地召し上げられ牢人となる『木田郡誌』『爺は宮に』

第 12 図 神内氏関係史料から作成した神内氏系図

### 第3節 神内氏関係史料に見られる石塔群の記述

先述した『神内氏系図略記』には、今回報告した石塔群について若干の記述があることから、ここで紹介するものである。『神内氏系図略記』は複数あり、微妙に記述が違うが、大筋では次のとおりである。「城跡台山に連続する北端の山林中に、拾掛塚二個および五輪の苔むした古墳六基がある。一基の周囲約五坪に小石をふき置いている。この石は、遠く香川郡香東川より運んだものである。約一里半の距離である。境内には老松老杉および雜木がある。神内佐渡頭より古墳は始祖の最も大切なものなので、荒神宮と尊称し、毎年九月二十八日を例祭日として、社僧蓮花院と神職小野等を招いて祭っている。現在に至るまで一族が順番に祭っている。」とある。



第13図 中世末期における神内氏勢力図

(香川県教委 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』を元に作成)

注1 「全漢史」は、文政十一年(1828)に讃岐の儒者中山城山により完成した讃岐の歴史書。全12巻。

注2 「讚陽古城記」は、讃岐の古城跡を城ごとに由来を記したもの。弘化三年(1846)片山勝次郎著。

注3 「讃岐國名勝圖会」は、嘉永六年(1853)梶原藍水が父藍葉の原稿を引き継いで完成させた讃岐の名勝旧跡を紹介した歴史書。

注4 「南海通記」は、細川氏時代から天正年間に至る四国の軍記物である。著者は軍学者香西成賀。寛文三年(1663)に著わされ、享保四年(1719)に白峰守に奉納されたものが、安永二年(1714)に『南海治亂記』として刊行されている。

注5 雄尾八幡神社の創設については、「木田郡誌」では用明天皇の時または養老元年(717~724年)の行基による2説をあげている。

注6 雄尾八幡神社には、神内右近頭政成奉納といわれる「鳥甲地双雀鏡」が伝えられているが、鏡の制作年代は鎌倉時代でも後半と推定される。この年代差は、五輪塔と符合する。

#### 参考文献

秋山忠 1982『古城跡を防ねて』高松市の文化財、第7編 高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会発行

香川県教育委員会 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』

香西成賀 1663『南海通記』(歴史図書社 1976『南海通記 四国軍記』所収)

梶原藍水・藍水 1853『讃岐國名勝圖会』

片山勝次郎 1846『讚陽古城記』(『香川叢書』第二卷所収 1941)

四国新聞社出版委員会編 1984『香川県大百科事典』

高松市教育委員会 2001『高松市内遺跡発掘調査概報—平成12年度国庫補助事業—』

中山城山図記著 1828, 青井常太郎校訂 1937『国宝全譜史』藤川書店

山田彌三吉編 1940『木田郡誌』木田郡教育会発行

吉田重福 1974『爺は宮に』

作者不詳『神内氏系図略記』



1 墓地遠景  
(南から)



2 墓地遠景  
(西から)



3 五輪塔 No.1・2  
(西から)



1 五輪塔 No.1 (西から)



2 五輪塔 No.2 (南西から)



3 五輪塔 No.3 (南から)



4 五輪塔 No.4 (東から)



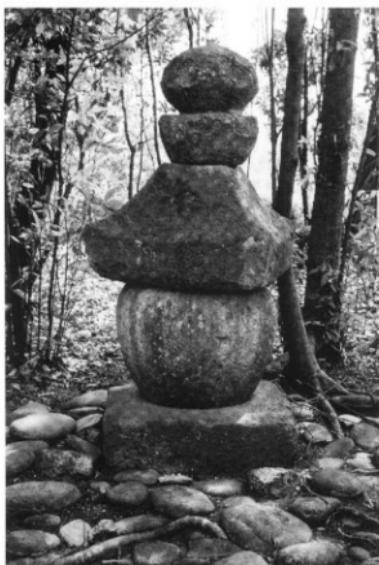
1 五輪塔 No.5 (北から)



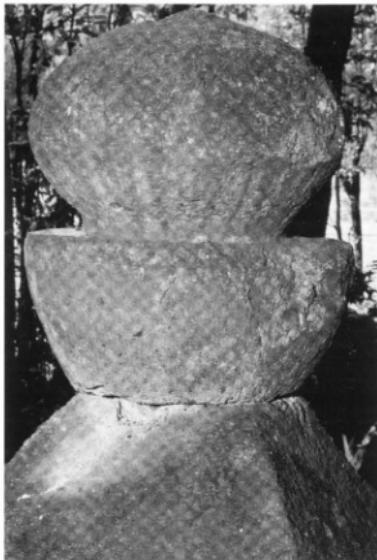
2 五輪塔 No.5 銘文



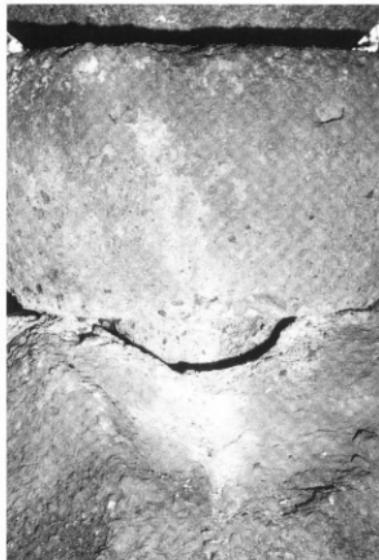
3 五輪塔 No.6 (北から)



4 五輪塔 No.7 (北西から)



1 五輪塔 No.7 空輪・風輪



2 五輪塔 No. 7 風輪・火輪加工狀況



3 五輪塔 No.7 地輪上面加工狀況



4 五輪塔 No.7 地輪側面加工狀況



1 五輪塔 No.8 (南西から)



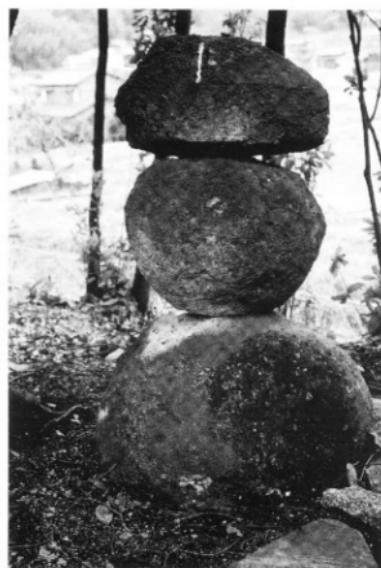
2 五輪塔 No.8 空輪・風輪加工状況



3 五輪塔 No.9 (北西から)



4 五輪塔 No.10 (北西から)



1 五輪塔 No.11 (北西から)



2 五輪塔 No.12 (南西から)



3 五輪塔 No.13 (北東から)



4 灯籠 (東から)



1 宝篋印塔（南東から）



2 宝篋印塔（西から）



3 宝篋印塔相輪



4 宝篋印塔笠



5 宝篋印塔基礎



1 五輪塔 No.14 (北東から)



2 五輪塔 No.14 (南東から)



3 五輪塔 No.14 銘文



4 近世墓地 (北東から)

報告書抄録

ふりがな	じんないけぼちせきとうぐん							
書名	神内家墓地石塔群							
副書名	香川県高松市西植田町所在五輪塔群・宝篋印塔の調査							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第85集							
編著者名	藤澤典彦, 川畑聰							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2636							
発行年月日	平成17年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	市町村	遺跡番号	コード					
じんないけぼち 神内家墓地	たかまつしにしうえた 高松市西植田 町3564番地	37201		34° 13' 53"	134° 4' 38"	H13.3.15 ~ H13.3.17	942	緊急調査
(旧日本) (測地系)								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
神内家墓地	墓地	鎌倉時代 ~ 室町時代	五輪塔 集石遺構 宝篋印塔	なし				

## 神内家墓地石塔群

編集・発行 高松市教育委員会  
高松市番町一丁目8番15号  
発 行 日 平成17年3月31日  
印 刷 有限会社中央ファイリング